

情報誌 ムービング

Moving

2026.2



北九州市立
男女共同参画センター

ムーブ

開所30周年

vol.108

CONTENTS

2 特集

Allに潜むジェンダーバイアス

4 誌上講座[第2回]

女性のキャリアと改姓

「旧姓の通称使用」拡大という欺瞞

5 講座・講演会報告

9 リレーエッセイ

北九州市 Work Life Balance表彰

10 Cutting-Edge



AIに潜む ジェンダーバイアス



政治学博士・東京大学大学院 情報学環 教授

たなか とうこ
田中 東子さん

横浜市出身。専攻はメディア文化と現代フェミニズム理論。主著に『メディア文化とジェンダーの政治学』（世界思想社、2012）、『オタク文化とフェミニズム』（青土社、2024）など。

1. 日常化するAIテクノロジー

人工知能 (artificial intelligence)、通称「AI」は、少し前まで一般の人にとって自分たちの生活とは縁遠いと思われる技術でした。しかし、2022年11月30日にOpenAIによって開発されたChatGPTが一般公開されると、瞬間に利用者は急増。なんと、公開からわずか2カ月でユーザー数が1億人を突破したのです。

いまや生成AIやチャットボットを知らない人はいなくなりました。80代の私の両親でさえも、AIの使い方を教えてほしいと電話で連絡してくるほどなのです。でも、使い方を教わる必要などないのです。実は私たちが日常的に利用しているスマートフォンや各種のアプリには、すでにAIが実装化されています。多くの人はそのことをあまり意識せずに生活していることから、自分たちがAIを利活用していることに気づいていないのでしょうか。

たとえば、インターネットを介して商品やサービスを買収するECサイト(有名なものとしてはAmazonや楽天などがある)で何か商品を購入したとします。購入すると、直ちにあなたのスマホには関連するお薦め商品が表示されるようになるはずですが、InstagramやXなどのソーシャルメディアでアカウントを作って投稿をしている場合には、あなたのタイムラインにいくつもの広告が表示されていることでしょうか。ソーシャルメディアのプラットフォームやECサイトにはAIが組み込まれており、私たちがサービスを使うたびに、利用者の年齢や属性、居住地域のデータなどをこっそり読み取り、お薦めの商品やサービスを自動的に送り付けてくる仕組みになっているのです。

つまり、私たちはみな、意識させられる暇もなくAIと接触し、利用していて、AIのテクノロジーによって選別された情報を受け取っているのです。「AIと接触し、AIに選別された情報を受け取っている」と聞かされて、みなさんはどう感じただしょうか。AIは便利だと思うのでしょうか。AIは機械だから公平で中立、AIは客観的なデータを送ってくれているはず、と考えるのではないのでしょうか。

でも、AIは本当に「客観的で中立なテクノロジー」なのでしょうか。

2. AIは「中立なテクノロジー」?

少し前に、フランスに出張したときの話です。長い飛行機の移動時間に、フランスのテレビ局の制作した短いドキュメンタリー「AIは性差別主義者なの?」という番組を視聴しました。番組の冒頭、パリの大学生たちが生成AIに「大学教授のイラストを描いて」と指示する場面で、生成AIは白人の男性教授のイラストばかりを描き、女性の教授を一枚も描かないというエピソードが紹介されていました。

実は、私も同じ実験を何度もしたことがあります。「大学教授を描いて」や「政治家を描いて」と命令してみるので、生成AIはほとんどの場合、「男性」教授や「男性」政治家のイラストばかりを生成します。逆に、「看護師の絵を描いて」と命令すると、生成AIはほぼ「若い女性看護師」のイラストを描いてくれるのです。ここには、特定の職業とジェンダーをステレオタイプ的に結びつける、性別役割分業という偏った意識を生成AIが持っていることを見取することができます。朝日新聞でも、生成AIの描くイラストが性別役割分業を強化し、ジェンダーに基づく差別を行っているという特集記事が掲載されました(注1)



【図1】 AIイラストくんで筆者が作成した「大学教授のイラスト」のうちの1枚

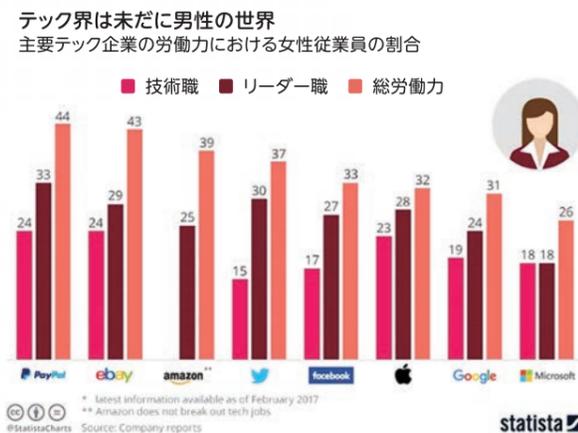
AIは機械です。機械というよりも、「アルゴリズム」と呼ばれる膨大なデータを処理するための計算や手順の総体がAIである、というのが正しいでしょう。AIは人間と違って、心や意識のようなものを持つことはありません。どれほど人間のように会話し、ふるまっているように見えたとしても、それはあくまでも「人間のようにふるまうような手順」を踏まえて会話をしているにすぎません。

しかしAIは、これまで人間が作り出し、人間が残してき

た膨大なデータを学習して、さまざまな判断や情報の選択、文章やイラストなどの生成を行う技術です。そのため、人間社会に潜んでいるバイアスやステレオタイプをそのまま取り込み、多くの場合、それらを増幅させて再生産してしまうのです。AIは過去のデータを学ぶことで未来を推測する仕組みを持つため、偏ったデータから偏った判断をしてしまうのです。つまり、AIの偏りは新しく生みだされたものではなく、むしろ人間のもつ偏見や認知の歪みが、AIの学習によって「可視化」されてしまうのだといえます。

生成AIによってジェンダーバイアスが作り出された例としては、顔認識の技術にまつわる失敗例が有名です。少し前の話になりますが、顔認識AIは、白人男性の顔の認識精度が非常に高いのに対し、黒人女性ではエラー率が20~30%にもなることが分かりました。これは、AIの開発者に白人男性が多く、人間の顔認証の学習が白人と男性に偏ってしまったことによって生じたバイアスであるということが分かっています。(注2)

【図2】 テック産業で働く技術者の女性割合(注3)



AIは私たちを手助けしてくれる便利なテクノロジーであると同時に、私たちの価値観を狭め、旧態依然のジェンダーバイアスやジェンダーステレオタイプをより一層強化した情報を生成することもあるのです。こうしたことは、もっとよく知られてもよい重要なポイントだと考えています。つまり、公平で客観的であるように見えるAIが、実は社会の偏見やバイアスを取り込みながら、さまざまな決定を下しているのが現実なのです。

例えば、マサチューセッツ工科大学は、AIに学習させたデータに人種差別的であったり女性差別的であったりする情報を使用していたとして、「このようなデータセットを永久に使用しない」と謝罪しました。(注4) また、Stable Diffusionという有名な画像生成AIは、開発の際に用いたデータセット「LAION-5B」に児童への性的虐待に関係するコンテンツが含まれていたことが発覚し、騒動になりました。(注5)

3. 私たちにできること

では、こうしたAIによって生み出されるジェンダーバイアスと、私たちはどのように向き合えばよいのでしょうか。今後おそらく、マスメディアや自治体で働く人たちも、生成AIが作り出す文章やイラストを使って仕事を進めていく時代になることが想定されます。

しかし、生成AIの生み出す情報やデータにバイアスが含まれている、ということをもし私たちが知らないままでいるならば、自治体の公開する文章やイラストにジェンダーに基づく偏見やステレオタイプ、さまざまなバイアスが含まれていたとしても気づくことなく、それを鵜呑みにしてしまうかもしれません。

したがって、まず必要なのは「AIは中立ではない」という前提を共有することです。学校教育や市民講座で「AIリテラシー」について学び、AIへの知識を得ることは、これからの地域社会にとって不可欠になることでしょう。

また、自治体や教育現場でAIを導入していく場合にも、ジェンダーやその他のさまざまな情報に関してバイアスが生成されていないかどうか、慎重に確認することが求められるようになるでしょう。例えば、AIを用いた新規職員の採用や、市民のための相談窓口の対応を自動化し、AIにゆだねた場合に、AIが「過去のバイアス」や偏った認識を反映して人間に対応してしまった事例は、海外でも多く報告されています。

しかし、AIに潜むジェンダーバイアスは、これまで私たちの社会が抱えてきたバイアスを表面化させたものであるということは、さまざまなバイアスに気づかせてくれて、改善に向かうチャンスと捉えてみることもできます。

AIが正しい方向に向かって開発されていくためには、私たちの価値観のリニューアルが必要とされるのではないのでしょうか。

(注1) 篠健一郎 山崎啓介 分析・新妻巧朗、「飛行士は男、看護師は女…ChatGPT、職業にジェンダーバイアス」2023年11月9日、朝日新聞
(https://www.asahi.com/articles/ASRC94PX0R3ULLI001.html?ref=pc_extlink)
最終アクセスは2025年11月30日

(注2) Buolamwini, Joy and Geburu, Timnit (2018) "Gender Shades: Intersectional Accuracy Disparities in Commercial Gender Classification," in Proceedings of Machine Learning Research 81:1-15.

(注3) World Economic Forum
(<https://www.weforum.org/stories/2017/08/women-in-tech-gender-parity/>)
最終アクセスは2025年11月30日

(注4) Katlyanna Quach, "MIT apologizes, permanently pulls offline huge dataset that taught AI systems to use racist, misogynistic slurs", The Register, 2020年7月1日
(https://www.theregister.com/2020/07/01/mit_dataset_removed/)
最終アクセスは2025年11月30日

(注5) ITアナリスト・小林啓倫「寄稿」児童への性虐待「学習」も発覚 生成AI時代に浮上、新たな教育問題 2024年1月5日
(<https://digital.asahi.com/articles/ASRD4T3QRDXULLI002.html?pn=9&unlock=1#contenthere>)
最終アクセスは2025年11月30日

女性の キャリアと改姓



慶應義塾大学 文学部 准教授
さかい ゆういちろう
阪井 裕一郎さん

1981年、愛知県生まれ。慶應義塾大学文学部准教授。博士(社会学)。著書に『結婚の社会学』(ちくま新書)、『仲人の近代—見合い結婚の歴史社会学』(青弓社)、『事実婚と夫婦別姓の社会学』(白澤社)など。



「旧姓の通称使用」拡大という欺瞞ぎまん

今回は、旧姓の通称使用の拡大という現政府が進めようとしている法案に対する憤りを表明したいと思います。前回は触れたように、旧姓の通称使用は別姓の選択肢のない日本で、婚姻改姓によって不利益を被った女性たちが獲得してきた権利です。にもかかわらず、現在では選択的夫婦別姓制度をなんとしても阻みたい反対派の「有効な武器」にされています。

今回の法案に対して何より憤りを覚えるのは、これが「女性のために」ではなく、女性の権利を抑え込むために強行されようとしていることが明らかだからです。そもそも誰が「旧姓の通称使用拡大」を求めて声をあげているのでしょうか？この法案は、長らく選択的夫婦別姓制度を求めてきた人たちの声を一切無視したうえで、表向き「女性を働きやすくする」という名目を掲げながら、本当は単に別姓を求める声を抑え込みたい、当事者の希望を打ち砕きたいという意志から発案されています。「女性のため」という、けっして本心にはないことを標榜しつつ、困っている女性たちの要望を打ち砕き、沈黙させようという意図が見えます。この法制化を支持し歓迎している層を見ても明らかでしょう。女性の権利や自立を嫌悪し、否定し、時に嘲笑する、女性が働きやすくなることなどこれっぽっちも願っていない人たちです。これはいったい誰のための法案なのか？

おそらく改姓して通称使用を選択する男性は増えないでしょう。婚姻時の改姓9割以上が女性という現状を存続させ、さまざまな理由から結婚後も自分の名前を名乗りたいと望む人々には失望をもたらすだけです。

そもそも「旧姓の通称使用拡大」という施策は多くの欺瞞や矛盾に充ちたものです。

第一に、「コスト」の面です。選択的夫婦別姓を実現するのにかかるシステム上のコストは戸籍を改修することのみです。1996年の法制審議会の答申以来、すでに戸籍システムは別姓に対応済みになっておりコストがそれほどかからないことは周知の事実です。一方、通称使用の拡大という旧姓と新姓の二つを管理させようという新しい案は、戸籍以外の官民あらゆるシステムの対応を要請し

ます。ルールも不明瞭で、莫大なコストはもちろん、不都合やトラブルが生じることは目に見えています。いったい誰のためにそのコストをかけるのか？

第二に、「根拠のない名前」を増殖させることの影響です。ただでさえ、多様化する社会に法が対応していないことで、戸籍と家族実態には乖離かいりが起っています。日常で使用することもなく、誰にも認識されていない名前だけが戸籍に記載され、通称名が普及する。戸籍と実態の乖離が進むばかりです。そもそもこの日本特有のルールは海外に出れば何の意味もなく、すでに存在する不都合や面倒を存続させるだけです。国内外を股にかけ働く会社や人は増え、デジタル化が進行する世界では通称名の増殖はビジネスや投資等における当事者の信頼性を脅かします。

第三に、選択的夫婦別姓制度は「働く女性のため」だけに求められているものではないという点です。名前に対するさまざまなニーズわいしょうかに見向きもせず、「働く女性」という一部分にのみ矮小化わいしょうかしています。ますます声を上げにくくなる女性も増えるでしょう。

夫婦や親子が違う姓を持つことに反対する人には、いっそのこと旧姓の通称使用も否定し、「家族はいつも同じ名前を名乗るべきだ」と主張してほしいとさえ思います。その方がよほど理にかなっており一貫性があります。法案は、戸籍上の同姓強制を維持することに固執するあまり、現実困っている人の問題は解決しないどころか、社会のあらゆる場所と人に莫大な労力やコスト、混乱を引き起こします。

残念なことに、選択的夫婦別姓を求む女性たちの声を抑え込もうという法案の思惑が功を奏する可能性は低くありません。それでも、われわれは根本的な問いを投げ続けていかなければなりません。旧姓使用云々の前に、そもそもなぜ法的に同じ姓にする必然性があるのか。なぜ婚姻時に一方が改姓を強いられるのか。その合理的な根拠は一体何か。「旧姓使用の拡大」と「選択的夫婦別姓制度」の二つがまったく別の問題であることをわれわれは今後も訴え続けていく必要があります。

講座報告

様々な分野での女性の参画推進講座

世界の行政官とおしゃべりしよう！

DIVERSE VOICES

～世界とつながるジェンダー対話～

令和7年11月1日(土) ムーブ 5階 大セミナールーム



今年度の「世界の行政官とおしゃべりしよう！」はムーブと(公財)アジア女性交流・研究フォーラム、そして小倉北区で英会話スクールや国際交流イベントを主宰する「小倉英会話スクール&カフェ」との共同開催でした。JICA「行政官のためのジェンダー主流化政策2025」研修受講のため来日していた世界7カ国8名の行政官と市民参加者が「DIVERSE VOICES」をテーマに、「家事や育児の分

担」といった身近なジェンダー問題についてディスカッションし、互いの国のジェンダー規範の共通点や相違点について話し合いました。ほかにも日英2カ国語での司会進行や、行政官たちの出身国であるインド、パキスタンに伝わるヘナアート、フィリピンの竹ダンス(ティニクリン)体験などのアクティビティを通じて、英語も国際文化交流もどちらも時間いっぱい楽しめた一日でした。

おとこの魅力アップシリーズ

育児男子 令和7年9月27日(土)



【講師】福岡県 助産師会会員 助産師
きのした ひろえ
木下 広江さん

NPO法人 ファザーリング・ジャパン九州 理事
たかはし けんじ
高橋 建二さん

講座の始まりは「Papa's カフェ アイスブレイク」。3人ずつのグループ分けをし、コーヒーやお菓子を楽しみながら自己紹介をメンバーを替えて2回繰り返す、非常にリラックスした雰囲気となりました。続いて、パートナーの妊娠中の心や体の変化、産前産後のコミュニケーションの回り方や大切さを学び、「父親の産後うつ」をテーマに、参加者自身の状況を共有しながら、男性同士で話をする良い機会となり、とても有意義なひとときとなりました。

父と子の料理教室

令和7年8月24日(日)



夏休み終了目前の日曜日に、「父と子の料理教室」を開催しました。

8月31日が「野菜の日」にちなんで、野菜たっぷりキーマカレーに冷たいスープ、フルーツポンチを作りました。

まずは冷たいものから調理を開始し、保護者と一緒にキュウリの皮むきや具材切り、トマトの湯むきをしました。玉ねぎを切るのには目にしみて大変なため、お父さんに頑張ってもらいました。

調理の過程で火を使う作業は、危険を伴うためお父さんにしてもらいましたが、年齢の高いお子さんには、炒める作業も経験してもらいました。そうしてできた料理をみんなでおいしくいただきました。



おとこのライフセミナー

瀬地山 角さん 講演会

「笑って考えるワーク・ライフ・バランス
～男の家事が社会を救う!～」

令和7年10月11日(土) 13:30～15:00 ムーブ 5階 大セミナールーム



【講師】 東京大学大学院
総合文化研究科教授 瀬地山 角さん

さまざまな分野で活躍されている男性講師を招いて、ご自身の体験や生き方などをご講演いただく「おとこのライフセミナー」。今年度はジェンダー論を専門とし、10年間、2人の子どもの保育園の送迎を一手に担いながら、家事経験をお持ちの瀬地山 角さんに、女と男の「社会的性差」、新しい男女のあり方について、かつてのテレビコマーシャルの紹介を交えながら、ユーモアたっぷりにお話をいただきました。

私は、結婚相手を決める前に保育所を決めていた人間で、あまりこんな男性はいないと思います。全国の講演にも、会場の託児に預けて子どもたちを連れて回っていました。子育て中のお父さんは、一度は「ママがいい」と言われたことがあるかもしれませんが、ママとの時間が長すぎるといふサインなので、「頼れるのはこの人しかいない」という状況を作ること、子どものぐずりが減ります。出産は生物学的に女性にしかできませんが、子育てのプロセスの中で男性にできないことは何一つないのです。

2021年の社会生活基本調査によると、6歳未満の子を持つ共働き世帯での家事関連時間は、男性約2時間、女性約6時間半となっています。男性の著しく短い家事時間は、社会的に問題にすべき水準です。共働き世帯の男性が1日平均約3時間の家事をすると、年間で約1,000時間。約1,000時間の家事が、女性のフルタイム就労を可能にするのです。妻の年収が400万円とすれば、夫の家事の時給は4,000円となり、残業代よりも高くなるのです。世帯収入

を最大化すると考えると、妻の正社員就労以上の解はないのです。

子育てを「植林」と例え、植林をする林業者を女性労働者、植林をしない林業者を男性労働者とする、女性には子育てのコスト=植林のコストがかかっており、企業は、子育てをしない=植林のコストがかからない男性ばかりを採用するようになります。その結果、子育てのできない職場や社会ができていくのです。だからこそ、男性のワーク・ライフ・バランスや家事・育児への積極的な関与が重要となってきます。

男性は、「家事は避難訓練」と考え、最低限のサバイバルスキルとして身に付けてください。まずは、土日の昼ご飯から。次に平日の朝ご飯です。平日の朝ご飯は、所要時間10分ぐらいで技術はほとんどいらず、女性からの評価が高いのです。ゴミ出しも、作られたものを集積所へ持って行くだけでは、単なるゴミとの散歩です。家中のものを分別して袋を掛け直し、集積所へ持って行って初めて家事と言えるのです。

働く女性に贈る! お役立ちワンポイントセミナー

アンコンシャス・バイアスと境界線(バウンダリー)を知って、もっと自由に!

令和7年8月30日(土)

【講師】 臨床心理士 黒瀬 まり子さん



アンコンシャス・バイアスに気づき、潜在意識の中で自分を縛っている言葉を手放すこと、また、誰もが持っている自分と他者との安心・安全を守るための目に見えない境界線(バウンダリー)を尊重することの大切さを学びました。

働く女性のための感情整理術
～怒りに隠された“本音”とは

令和7年9月12日(金)

【講師】 アンガーカウンセラー®
江藤 弥生さん



アンガーマネジメントとは、怒りの本質を理解し、コントロールすることであり、怒りは良くも悪くもなる、時には危険から自分を守るために不可欠なものである。自分の怒りに向き合うことで、怒りを激しく表現せず穏やかに対応する習慣づくりを学びました。

女性への暴力ゼロ運動特別講座

身近に潜む盗撮の手口
～どうすれば見抜けるか～

令和7年11月8日(土) 13:30～16:00

令和5年7月に性的姿態撮影等処罰法が新設されたことにより盗撮犯罪に対する意識が高まる中、「盗撮の被害者も加害者も出さない社会」を作るために私たちはどうすればいいのか、講義と体験を通して一緒に学び考えました。



【講師】 盗撮防犯Wc代表 山内 千春さん

私たちは、2016年から公衆トイレや施設などに盗撮カメラが仕掛けられていないかチェックするパトロールや、防犯ステッカーを配布する活動を続けています。盗撮は、被写体になる人物に気づかれないように、こっそり撮影をするという本人の同意を無視した卑劣な行為です。カメラは高性能に小型化し、容易にインターネットで入手することが可能になっています。置き時計型、メガネ型、ネジ型、モバイルバッテリー型など、一見カメラが仕掛けられていることに気づくことが困難なものばかりです。ある大学生は、業者が自宅の風呂場に取りつけた火災報知器が上から落ちてきたことで、中にカメラが仕掛けられていることに気づいたそうです。

盗撮の画像や映像はインターネット上で売買されており、盗撮ビジネス市場は数百億円とも言われています。ある高校生は、最

初は遊び半分で撮影していましたが、高値で売れることに気づきエスカレートして売買するようになったそうです。非接触型の盗撮は性犯罪であるとの意識が低く、SNSに投稿して注目されることで犯罪を助長し再犯を生み出します。加害者を生まないためには、子どもたちへの性教育と倫理教育が大切です。自分の行為が相手にどんな影響を与えるかを考えられる力、それが加害を生まない防犯教育につながります。私たち大人も、普段利用する施設や職場、子どもたちが通う学校等をカメラが仕掛けにくい空間に整えることが重要です。

トイレに入った時にカメラがないか意識すると自分のためにも誰かのためにもなります。そんな人が増えて、被害者も加害者も生まない社会が実現できるといいなと思っています。

男女共同参画啓発講座 ムーブ映画祭

『取り残された人々：
日本におけるシングルマザーの苦境』(2024年/日本)
上映

令和7年12月6日(土) ムーブ2階 ホール

ライオン・マカヴォイ監督

アフタートーク 北九州市障害者基幹相談支援センター 副センター長 松本 麻子さん

進行: 小倉昭和館 館主 樋口 智巳さん



日本在住のオーストラリア人監督、ライオン・マカヴォイ氏による、日本のシングルマザーをテーマにしたドキュメンタリー作品を上映。シングルマザーを取り巻く過酷な実情を、日本の社会・文化・歴史など様々な角度から掘り下げ、見えにくい現実が描かれています。上映後のアフタートークにはマカヴォイ監督が登場し、北九州市でシングルマザーの支援にあたってこられた松本さんと対談されました。

マカヴォイ監督は「映像の力でよりよい社会をつくりたい」との思いからドキュメンタリー製作を開始。あるシングルマザーとの出会いが本作を撮るきっかけになったと語り、日本社会に対して抱いた疑問や日本とオーストラリアの制度の違いについてお話しされました。続いて松本さんから、北九州市におけるシングルマザーの実情が紹介されました。地域のつながりが残る一方で、固定化した家族観やジェンダーロールが根付いており、そこから外れる人々が追いやられてしまっていると

指摘し、大切なことは「状況を正しく理解し、相手の背景に想像を馳せ、自分の倫理観や正義感を押し付けないこと」だと提起されました。母子世帯の貧困がなぜ見えにくいのか、その背景を丹念に描いた本作の上映を通じて、シングルマザーの置かれた苦境について考えるひとときとなり、参加者からは「日本の貧困率の高さに驚いた」「シングルマザーが大変だとは思っていたが、これまで詳しく知る機会がなかった」などの声が多数寄せられました。